

Title	歴史を観る眼
Sub Title	
Author	寺尾, 誠(Terao, Makoto)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1978
Jtitle	哲學 No.68 (1978. 10) ,p.164- 165
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	三田哲学会例会発表要旨
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000068-0164

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

歴史を観る眼

寺尾 誠

歴史を造るのは人間である。それは人間の行為の合成物である。それは過ぎ去った過去、過ぎ去りつつある現在、来りつつある未来、つまり確定した部分と確定しつつ、なお未確定を含む部分と未確定の部分から成る悠久の時の流れの内に無限に開かれた人間の行為の集積系列である。その系列の焦点は現在である。現在、確定しつつも、なお未確定な時の一点こそ歴史の原点であり、そこにおける行為の原構造こそ歴史の本質である。そこにおいて人間は確定した過去と未確定の未来を取りこみつつ、合目的的に、また合意志的に行為する。過去において自らが得た知識を手段化しつつ未確定の未来を先取りする合目的性は、人間の行為の、従ってまた歴史の本質の半面である。今日の科学技術文明はこの半面が極端に膨脹したもので、人間の未来は未確定、不可知なものではなく、恰も確定し知りうるものであるかのように捉えられる。とりわけ人間が外的自然に対して発達させた認識とその手段の応用は、この可知的合目的性を無限に信仰させてしまう。沢田氏の「認識の風景」は、現代の科学技術文明の認識的独走に対し価値的制動を加えることを提唱し、行動の原構造における感覚、特に視覚のもつ合目的制御に価値的制動の原点を見出そうとしたもので、現在の危機に対する歴史意識としてみれば一頭地を抜いている。だが基本的にそれは可知的合目的性への無限の信仰に支えられており、ただそこに視覚的モラルの色づけが行われているに過ぎない。それは合目的的に歴史を観る立場であって、歴史についての合目的的視力を自負している。

他方、人間の行為の原構造にはもう一つの半面がある。人間は外的対象に対して何らかの欲求を抱いて働きかけ、それが行為となる。欲求が無限で不定型なのが人間の特性であるが、それを制御し、定型化していくのが、意志形成である。それは内的自然としての人間の自己制御であり、人間の行為の合意志性である。外的自然に対する知識やその手段的応用、つまり合目的的な人間の行為は、この合意志性と組み合わされて始めて有効となる。例えば古典古代の文化は合目的性への志向を早熟に発達させたが、その志向が途中で挫折してしまったのは、それに必要な合意志性を育てえなかった為である。反対に近世の西欧が合目的性の新たな跳躍をなしたのは、宗教改革という形で、必要な合意志性の転換が行われたからである。所で人間の合意志的制御は、人間自体、つまり内的自然の自己制御であるが、それは内的自然を座標軸として縦軸に時の流れ、横軸に社会の関係とする、複雑な構造をもつ。西田幾多郎氏の哲学はこの複雑な構造を「純粹経験」の立場から考察したものである。沢田氏の哲学が合目的的な歴史観察であるとするれば西田氏のそれは合意志

的な歴史観照である。しかも知情意や主客が未分化な、何ら細工なき経験世界を原点とし、独特の矛盾的弁証法によりつつ知情意の分化、自律化や主客の対立を体系化しようとした西田哲学は学ぶべき所が多い。但しその弁証法なり体系化の試みを貫く独特の直観には、西田氏自身が表現する日本的な価値情念たる「純粹なる人情」の影が投射され、直接的相対性の形で古今東西の哲学、宗教の止揚、綜合が合意志的に試みられている。それは歴史についての合目的的な視力の恐しい威力に煙幕をばり、日本的価値情念の理性版として、特殊な合意志的視力を自負してしまう。そこに西田的観照（神秘主義）が必然化する。

歴史における合目的な視力と合意志的視力とを両方とも視野に入れ、且つその間に有効な組み合わせを造り出すことは今日至難である。それは合目的な視力の肥大化のためでもあり、それと関連した合意志的視力の減退のためでもある。まず第一に新しい意志形成が、価値理念の発見が必要であり、しかも第二にそれが合目的性との関係を視野に入れた合意志性として、新しい未来形成に役立たなくてはならない。それが必要な事は判っているが、それらの課題を人間が果しうるのかどうかについて、私は多分に懐疑的である。

そこで合目的性と合意志性の、これまでの結合を省りみたい。後者は、内的自然に対する神秘主義、人間主義、自然主義の価値理念を軸に、伝統主義、合理主義、理想主義の時間意識、受動主義、能動主義、過激主義の社会意識という円環構造をもつ。このうち合目的性との関係はまず、内的自然についての価値理念においてみられる。先の三類型は人間存在を非合理で神秘的な存在、非合理で神秘的であると同時に合理で人間的である矛盾する存在、合理で理想的な存在という風に捉える。外的自然との関係でいえば、神秘主義では内外の自然の区別がつかず、それを貫く超自然的なものに対する信仰が、人間主義では内外の区別が、内的自然つまり人間自体の自己制御に重心を置いて行われ、内的自然を制御してくれる超自然的な価値理念への信仰が、自然主義では内外の区別は外的自然に対する科学的認識の発達の結果、行われ、しかも内的自然への自己制御は超越的な価値理念への信仰によってではなく人間自体の理想化、未来の可能性への無限の信仰が、それぞれ問題となる。歴史的には第三類型が古典古代そしてマルクス主義においてみられ、第二類型が中世から近世の西欧、ルネサンスから宗教改革においてみられた。そして後者が今日の西欧の科学技術文明の跳躍台となったのである。前者特にマルクス主義はその科学技術文明の危機を克服しうると自負はしているものの、人間存在の暗い一面、非合理で神秘的な一面を理性で割り切るために意志形成が理想に走る。そしてこの暗い一面に対し今日有効な価値理念が欠け、時間や社会の価値意識が管理資本主義時代の商品経済やえせ民主制の合目的性に歯止めをかけられない所に、歴史、とりわけ現在から未来への視力において合目的性の肥大化と合意志性の矮少化の病の最大深因があるのである。